



都市難民の子どもたちの活動が始まりました

現在ジブチ共和国に住むイエメン難民約 3,500 名のうち、6 割を超える約 2,300 名が、首都ジブチ市に住んでいます。長期化する厳しい難民キャンプ生活に耐え切れず、家や仕事を求めてジブチ市に出てくるのです。しかし、ジブチ市において、難民への活動はほとんど存在しません。そこでアイキャンは、イエメン難民子どもたちの保護事業を首都へも広げることになりました。

2 月、首都に住む約 30 名のイエメン難民の子どもたちを対象に、安心・安全に過ごせる場所を提供する「子どもの広場」活動を実施しました。事前の希望が多かったサッカーやお絵描き等の活動を通して、紛争で傷つき、日々の生活の中で強いストレスを受けている子どもたちの心のケアになると同時に、学びの場ともなることをめざしました。今回の活動の特徴は、若者や大人も積極的に活動に参加したことです。小さな子どもからは、「いつもは忙しいお母さんと一緒に、様々な色を使ってお絵描きができて、嬉しかった。」といった声が聞かれました。また、サッカーには 5~18 歳の男女が参加し、大人の男性もキーパーとして参加してくれました。活動に参加した周囲の大人たちは、スタッフと一緒に子どもの喧嘩を仲裁したり、子どもたちを見守りました。一方で、ただ自由に子どもを遊ばせる傾向も見られたため、スタッフが言葉の分かる大人にサッカールールを説明し、子どもたちの協調性や社会性を育みながら活動を進めました。

実施までには多くの困難もありました。例えば、ジブチ市の難民は散在して生活しています。「子どもの広場」を開催しようにも、どこへ行けばイエメン難民がいるのか、手探りが続きました。いろいろ聞き回り、ようやく、難民が多く住む地域の情報を得られ、今回の活動に至りました。また、初めてアイキャンと関わるようになった難民たちが、アイキャンの活動を受け入れてくれるのかも、最初は不安でした。活動への理解を得るために、コミュニティーの大人たちに活動目的を丁寧に説明する工夫をしたことで、積極的な協力につながりました。こうして、ジブチ市での「子どもの広場」活動の実施が実現しました。

都市難民を対象とした活動は始まったばかりですが、アイキャンでは、子どもたちが子どもらしく安心した生活ができるようになることを目指して、今後も活動を継続していきます。



ICAN ジブチ事務所
アブドゥラフマン
〜プロフィール〜

2016 年よりマルカジ難民キャンプの ICAN の活動ボランティアに参加。2018 年 2 月より現職。

Project Site



認定 NPO 法人アイキャン

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須 3-5-4 矢場町パークビル 9 階 TEL/FAX : 052-253-7299 メール: info@ican.or.jp

ホームページ <http://www.ican.or.jp> フェイスブック <https://www.facebook.com/ICAN.NGO>

<特集>
ジブチ

Close up

I. 危機的状況にある子どもたちと「ともに」行う活動

全6事業の中から、今回はこちらの2つをご紹介します。

①紛争の影響を受けた子どもたち 2月2日/マギンダナオ(フィリピン)

平和教育を自分たちの手で広めるために



アイキャンの研修に参加した教育省が主体となって、管轄の学校長や教師56名に平和教育のオリエンテーション及び教育方法の研修を実施しました。

教育省のカリタさん(52歳)は、「研修を通して平和教育の具体的な教授方法を学ぶことができ、研修で策定した行動計画を実施できて嬉しく思う。今後、平和教育をもっと各学校に広めていき、将来、子どもたちが平和を後押しする存在になっていってほしいと願っている。」と話しました。

②紛争の影響を受けた子どもたち 2月14-22日/ホデイダ(イエメン)

1,890世帯への食糧提供を実施



ホデイダ州の国内避難民等1,890世帯(約1.3万人)へ食糧を提供しました。

提供品を受け取った一人フッセンさんは、「子どもが7人います。生きていくのは大変です。紛争で燃料がなくなったため、漁業ができず、仕事がありません。食糧提供してくれるような団体もなく、1日2食しか食べられないこともよくあります。今回のアイキャンからの食糧提供で、家族みんなが毎日3食食べられるようになります。」と話しました。

II. できること (ICAN) を増やす活動

全7事業の中から、今回はこちらの2つをご紹介します。

NGO 相談員事業

2月14日/岐阜

世界を考えるきっかけ作り



恵那市立中野方小学校の6年生、全12名に対し講演を行いました。フィリピンで路上生活をする子どもたちや、中東イエメンやフィリピンの紛争下で生きる子どもたちが置かれた現状や課題、現地でのNGO活動について、写真や子どもたちの声を交えて紹介しました。

参加者からは「何がきっかけでNGOに入ったのか」、「他に関心のある国や課題は何か」といった質問があり、児童の世界への関心を喚起する講演となりました。

参加者からは「何がきっかけでNGOに入ったのか」、「他に関心のある国や課題は何か」といった質問があり、児童の世界への関心を喚起する講演となりました。

MY アイキャン事業

2月17日/愛知

寒空の下募金呼びかけ



紛争地イエメンの人々に対する活動のための街頭募金活動に、8名のボランティアが参加しました。小雪が舞う中、小学1年生の女の子も一緒に声を出して呼びかけてくれました。

参加者からは、「天候や歩行者の量に左右されないために、自分たちにできる工夫はたくさんあるのではないか」、「歩行者に関心を持ってもらえる声掛けが大事なのでは」といった感想もあり、今後の募金活動への課題を参加者間で共有し合うことができました。

今月のMedia

2月1日 UNHCR FACT SHEET Djibouti January2018 2月14日 THE PAGE 内線逃れジブチへ、イエメン難民の今
2月13日 電気新聞 テレビ電話で環境保護語る 2月28日 Aden AlGhad 他 イエメン・ホデイダでの食糧提供

今月のICAN 人

◎田嶋さん、あたたかい思いのもと「できること」を実践して下さい、ありがとうございます!

マンスリーパートナー 田嶋佑奈さん

「現地での体験を思いに」

インタビュー:2月20日

私がアイキャンを知ったきっかけは、2016年に大学のゼミで参加したスタディーツアーでした。パヤタスでごみを集めて生計を立てているスカベンジャーの方の家庭を訪れて、インタビューをしたり、ごみ山の歴史と現状を学んだり、また、ごみ山の集落にあるフェアトレード商品を作っている現場を見学しました。2000年にごみ山が崩落し、沢山の人がごみの下敷きになって亡くなった事実を抱えながら、懸命に生きている人々を目の当たりにして目頭が熱くなった事を今でも覚えています。そして、ごみによる健康被害についてのお話を聞き、環境問題と健康が強く結びついていることに興味を持ちました。



帰国後は自分でできる事を探したい! もっとフィリピンで勉強したい! という思いから、休学してフィリピンの環境NGOでインターンをしました。2017年に帰国後、日本でできる国際協力をしたと考えるようになりました。現地にいた時から気にしていたのは、ミンダナオで政府軍とイスラム過激派の戦いによって不自由な生活を送っている女性や子どもたちで、同じフィリピンに住む罪もない人々が苦しんでいるニュースを見て心が痛みました。そこからアイキャンがそういった被害を受けている人々と活動していると知り、「これだ!」と思いマンスリーパートナーに応募しました。私一人の力でできることは限られていますが、アイキャンを通して再びフィリピンと繋がりを持つことが出来てうれしく思います。また、フィリピンに限らず、理不尽に紛争に巻き込まれてしまった未来ある子どもたちのため、少しでも力になればと思っています。

【編集者から一言】 月々1,000円からのご寄付で子どもたちを応援することができます! お気軽にお問合せください。